第７４回

（令和６年度）

“社会を明るくする運動”
作文・ポスターコンテスト

高岡市小・中学校表彰作品集

社会を明るくする運動高岡市推進委員会

ご　挨　拶

第七十四回「社会を明るくする運動」
作文・ポスター作品集の刊行にあたって

社会を明るくする運動高岡市推進委員会委員長
高岡市長　角　田　悠　紀

このたび、第七十四回「社会を明るくする運動」作文・ポスター作品コンテストの表彰作品を決定しました。受賞されました児童・生徒の皆さんには、心からお祝いを申し上げます。

「社会を明るくする運動」は、全ての国民が、犯罪や非行の防止と、罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない明るい地域社会を築こうとする全国的な運動です。このコンテストは本運動の一環として実施され、作品集の刊行は今回で十二回目となりました。

学校関係者の皆様方には、作品の応募に協力していただきましたことに、深く感謝申し上げます。

児童・生徒の皆さんには、日常の家庭生活や学校生活の中で体験したことを基に、犯罪や非行のない明るい地域社会づくりについて考えたことや感じたことを作文やポスターにしていただきました。作文では、「誰かの不安や寂しさに気付き、その人に手を差し伸べること」や「身近な人との温かいつながり」、「ＳＮＳとの付き合い方」の重要性などを、ポスターでは、みんなで手をとり明るい社会を目指す姿などを彩り豊かに表現していただき、大変感動しました。いずれの作品もとても素晴らしいものでありました。

このコンテストを通じて、次世代を担う児童・生徒の皆さんには、犯罪や非行といった問題について深く考え、是非、今後の人生において、社会を明るくすることに大きく貢献されますことを願っております。

また、本冊子は表彰作品を集めて刊行いたしました。多くの方にご覧いただき、児童・生徒の皆さんの思いや本運動の趣旨にご賛同をいただきますことを期待しております。

令和六年十二月

目次

【作文の部】

〈最優秀賞〉

みんなを守る青パト……高岡西部小学校　五年　鍛冶　咲彩子　1
〈第74回　社会を明るくする運動　富山県推進委員会　最優秀賞〉

一人にしない……志貴野中学校　三年　藤川　乃愛　3
〈第74回　社会を明るくする運動　富山県推進委員会　最優秀賞〉

助け合うことの大切さ……福岡小学校　六年　山田　菜々美　5
〈第74回　社会を明るくする運動　富山県推進委員会　優秀賞〉

周りの人たちがその人にとってどのような影響を与えるのか……五位中学校　二年　小西　心菜　6
〈第74回　社会を明るくする運動　富山県推進委員会　優秀賞〉

〈優秀賞〉

みんなのために……木津小学校　三年　福井　一颯　8

「ええところ」を見つけていくよ……太田小学校　四年　山口　永眞　9

ボランティア清掃……福岡小学校　六年　浦山　知也　10

かけがえのない家族との時間……福岡小学校　六年　綿谷　果歩　12

僕たちに出来るポジティブキャンペーン……野村小学校　六年　吉田　琉生　13

あなたから始めるSNS改革……高陵小学校　六年　渋谷　和希子　15

呼び方の怖さ……福岡中学校　一年　宮﨑　結月　17

挨拶から始まる人との関わり……志貴野中学校　一年　兼本　煌大　18

小さなことを大きな愛をもって……戸出中学校　三年　中田　昇馬　20

誰もが生きやすい社会……戸出中学校　三年　木村　葵衣　22

過去から学べたこと……高陵中学校　三年　冨田　芽依　24

おもてなしの心で……伏木中学校　三年　山下　稟一寅　26

〈入選〉

……28

作文の部

【ポスターの部】

〈最優秀賞〉

みんなでつなげば明るい社会 …… 野村小学校六年山岸千愛璃 29

手をとり明るい未来 …… 志貴野中学校二年甲栞和 29

〈優秀賞〉

みんなでえがお …… 能町小学校三年黒瀬遥 30

きく・はなす　つながるココロ …… 能町小学校三年柴楓真 30

「ありがとう」相手も自分もいい気持ち …… 五位小学校三年森田桃世 30

やめて！ポイ捨て …… 木津小学校四年竹端春瑛 31

みんな仲間　明るい社会 …… 野村小学校六年大井崇生 31

あなたらしくいればいい …… 野村小学校六年柿原永奈 31

一歩を踏み出す　勇気を共に …… 高岡西部中学校二年宮崎彩華 32

助け合おう　地球は一つ …… 高岡西部中学校三年中村心耶 32

一人じゃないよ …… 志貴野中学校三年西沢啓希 32

〈最優秀賞〉

みんなを守る青パト

高岡西部小学校　五年　鍛　冶　咲彩子

「カンカンカン。」外から聞こえるこわい音。青パトの音だ。

私のおじいちゃんは、いつもあわただしくすごしている。そんなおじいちゃんの口ぐせは、

「あっ今日会合がある。もう行かんなん。」

だ。いつもの言葉だ。おじいちゃんは青色防はんパトロール（青パト）をしているらしい。私は、青パトって何か気になった。そこで、青パトをしているおじいちゃんにインタビューをするといろいろなことが分かった。青パトでは、市内をじゅんかいして、青少年（十八さい未満）が悪い行いをしないように見はったり、声かけをしたりしているそうだ。私はそれを聞いて、毎回じゅんかいすることは大変だし、いつも見守ってくれる人がいるから、私たちは安全にくらせるのだと思った。また、街頭ほどうをしている時に行方不明者を発見して、その家まで送っていって家族から感謝されたということや、自転車で、無灯火の人に、

「あぶないから電気をつけてください。」

と注意することが多いと言っていた。中には、無視して行く人や言ってもつけてくれない人もいるそうだが、それでも毎回、声かけしているそうだ。私は声かけをすることで、行方不明者が見つかったり、自転車の無灯火がへったりするのだと思った。青パトの活動をすることで楽しいことやうれしいことは、けいさつかんから

「ごくろうさま。」

と言われることだそうだ。

「ごくろうさま。」

と言われるのは、私もうれしいので、とても共感した。

私も、おじいちゃんの青パトの仕事やいそがしく書類を準備したり、会合や電話をしたりしているのを見て、改めてとても大変だと思った。

私たちにできることは、自転車のライトをつけたり、悪い行いやはん罪（万引きなど）をしたりしないことで、社会が明るくなって、はん罪、非行がない社会になればいいと思った。

はん罪、非行をした人はもう一度、自分の行いを見直して、二度といっしょなことをしないように努めて、はん罪をした人も社会が明るくなる運動に協力してほしいと思う。

私が社会が明るくなる運動を考えたり、インタビューをしたりして分かったことは、青パトでは私たちが悪いことをしないように声かけをしたり、市内をじゅん回したりと私たちが安全に過ごせるように見ていてくれているので、きちんと感謝しないといけないなと思った。おじいちゃんも、いろいろやらないといけないことがたくさんあるのに、私たちのためにその時間をけずってまで見守ってくれているので、毎回「ありがとう。」などの温かい言葉を言ってあげたい。このことを、当たり前と思ってはいけないということや、私たちは関係ないとは思わずに、みんなで協力して、明るい社会を作っていきたい。これからも「ありがとう。」という気持ちをわすれずに生きていきたい。大人になったら、私も青パトをするなど、みんなの安全を守りたい。

「カンカンカン。」

今日もおじいちゃんの青パトの音だ。みんなを守るための青パト。こわいと思っていた音がとてもやさしくて、心強い大好きな音に聞こえるようになった。

おじいちゃん、青パトいってらっしゃい。

一人にしない

志貴野中学校　三年　**藤　川　乃　愛**

毎日目にするニュースでは、悲しく胸をしめつけられるような事件が多く報道されている。この作文を書くにあたって、なぜこのような事件は起こるのか、起きてしまうのか調べてみた。すると、非行を起こす人の多くが寂しさを感じていることが分かった。寂しさを紛らわすために居場所を求めて非行に走るケースもあるそうだ。このことを知り、私たちが目にしているニュースは事実のほんの一部にすぎないのだと気づいた。表に見える数少ない情報だけを見て「非行をする人」は「悪い人」と決めつけている。そんなことを多くの人々が無意識にしてしまっていると考えた。もしかすると非行の裏には誰かの悲しい想いが潜んでいるのかもしれない。そんな事実から目を背けてばかりだから非行はいつまでもなくならないのだと思う。非行のないまちづくりには、「一人にしない」ということが大切なのではないか。

私にはとても大切にしているものがある。それは「タイムくん」だ。タイムくんとは、毎日の時間割や感想を記入して先生に提出する生活記録表のことだ。タイムくんに書いた感想は必ず担任の先生のコメントが書かれて返ってくる。私はそのコメントを見る時間が毎日の楽しみの一つでもあった。特にその時間が格段に楽しかったのは私が中学二年生だった頃だ。先生のコメントは一言だけで返ってくるのが通常だが、先生は、毎日タイムくんがびっしりうまるほどのたくさんのコメントを書いてくださった。どんなくだらない内容を書いても、それを何倍も上回る量と内容をいつも書いてくださった。私はそのコメントに何度も救われた。人間関係や学習面で上手くいかないことが続き、ついタイムくんに愚痴をこぼしてしまった時、先生はこうコメントしてくださった。「自分を大切に、いつでも自分に自信をもって下さい。あなたはそのままでステキです。」これはまだコメントの一部だが、この言葉を見た時の光がさ

したようなあの気持ちは忘れられない。その後も何度も落ち込んではその度に先生の言葉に助けられた。

先生と過ごしたあの一年間で私は人に頼る大切さを学んだ。悩みを抱えている時、一人で思い詰めることで孤独のように感じてしまうかもしれない。けれどもそんな時こそ周りに助けを求めるべきだということを身をもって経験した。

これは非行のないまちづくりに生きる考えだと思う。冒頭で述べた通り、非行をしてしまう多くの人が寂しさを感じている。その寂しさを一人で抱え込んでしまうことが非行につながる。だから、そんな状態の人を「一人にしない」ということが私たちにできる一番の行動だと思う。「一人にしない」の形はいろいろあるが、例えば、輪に入れていない人を輪に入れる、寄りそって話を聞く、そばにいてあげる、どれも誰でもできる行動ではないだろうか。非行を止めるなんて不可能に近い難しい問題だとほとんどの人が思っていると思う。だが、私たちのささいな行動で非行を止められる可能性は十分にあるのだ。

「一人にしない」簡単な言葉であると感じるかもしれないが、それだけ多くの形が存在するのだ。自分の中での「一人にしない」とはどういった行動かよく追求し、一人一人が自分で出した正解に向かって行動していってほしいと思う。そうすることで非行のないまちへ大きく前進していくはずだ。

助け合うことの大切さ

福岡小学校　六年　山　田　菜々美

「困っている人がいたら助ける。そして自分が困っていたら助けを求める。一人一人助け合うことが大切だ。」と私は思っています。それは、小学校に入学する前、家族旅行に行ったときに、ある出来事があったからです。

旅行先で温泉に入った時、母がのぼせたのか、突然倒れそうになったのです。今だったら、自分で考えて行動することができたかもしれません。でも、この時の私は、まだ小さかったのでどうしたらよいのかも分からず、焦って何も出来ませんでした。そんな状況に気付いたのか、近くを通りかかった女の人が「大丈夫？」と声をかけてくださいました。今にも倒れそうになっている母に気付いた途端、血相を変えて、すぐに他の人たちに声をかけてくださいました。そして、その場にいた人達が協力して、母を助けてくださいました。そのおかげで、母は無事でした。一番に気付いてくださったあの方には、とても感謝しています。もし、あの方が助けてくださっていなかったら、もっと大変なことになっていたかもしれません。本当に助かりました。この経験があってから、知らない人でも困っている人がいたら助けたり、逆に自分が困っていたらすぐに助けを求めたりして、助け合うことの大切さを実感しました。

家族や友達が困っている姿を見て、いざ助けようと思っても「自分のかん違いだったらどうしよう」「助けようとして逆に迷惑になったらどうしよう」などと、考えてしまって助けることができない人もいると思います。それに、困っているときに助けを呼ぶことも迷惑をかけてしまうかもしれないと、考えてしまう人もいると思います。どちらも本当に難しくて勇気のいることです。それ以上に、知らない人を助けるということは、もっと勇気のいることだと思います。

「勇気をもって誰かを助けたい」と思って、過ごしているうちに、その時が来ました。下校中、一年生の子が転んでけがをしているところに出くわしたのです。私はすぐに、「大丈夫？」と声をかけました。その子は、ただただ泣いていました。それでも、自分にできることはないか考え、持っていたばんそうこうを渡しました。その後もはげまし続けていると、その子のお母さんが迎えにきました。お母さんに会えたことで、安心した表情に変わり、私もほっとしました。そして、ちょっとは、私も温泉で助けてくれたあの方のようになれたかなと思いました。

もしかしたら、相手が困っていると勝手に勘違いして、逆に迷惑をかけてしまうこともあるかもしれません。だけど、そのことを恐れて人助けをしないよりも、人助けをしようとして失敗した方が何倍もいいと思います。だから私は、誰か困っている人がいたら進んで声をかけて助けたり、自分が何かに困っているときは助けを求めたりして、一人一人が助け合って生きていける、そんな社会になったらいいなと思っています。そのために私はこれからも、困っている人に、勇気を出して声をかけていきたいと思います。

周りの人たちがその人にとって どのような影響を与えるのか

五位中学校　二年　小　西　心　菜

「周りの人たちがどのように接してあげるか考えることが重要。」この言葉は、クラスのある人が授業中にうるさくしていた時に教頭先生が私たちに発した言葉です。この言葉の意味はたぶん、「周りの環境がその人の行動につながるから、まずは周りの人たちが変わってみよう」という意味だと考えました。実際にいつも仲よくしている人が声かけをするなどその人への接し方を工夫してみると、その人は良いふうに変わり、クラス全員にも変化が出てきました。このようなことから教頭先生の言葉の重要さが分かってきました。

この言葉がきっかけで、ある出来事を思い出しました。

それは、小学校の時、近くの駄菓子屋で万引きが起こった事です。詳しいことはよく分かりませんが、駄菓子屋に何人かで一緒に行き、その中の誰かが万引きをしたと聞きました。そして、万引きの事をいろいろな人から聞かれていました。もし、自分が万引きをして他人に責められるとどのように感じますか。私だったら、自分でも悪いことをしたと思っているところに周りからしつこく聞かれたり、責められたりすると、余計につらくなると思います。私はこのような時こそ、教頭先生の言葉が生きてくるのではないかと思いました。

先程の授業中の例で言うと、「周りの環境はその人の良くない態度に関わってくる」という意味で使っていましたが、ここでは「周りの人たちが心の支えとなってあげる」という意味で使いたいと思います。周りの人たちのできることとしては、万引きをした人に対して、けなしたり、責めたりせず心の支えとなることが最大限にできることです。周りの人たちのちょっとした気遣いにより、犯罪者は立ち直るきっかけとなることでしょう。

私たちの社会には、万引きなどのいろいろな犯罪があり、犯罪者がいます。犯罪者と聞くと「悪い人」という固定概念から、そう感じてしまう人が数多くいると思いますが、逆に周りに犯罪者がいたら「悪い人」と非難するというよりは、どのように接していくべきかをこれからの未来を創っていく私たちは、考えていかなければならないと思います。教頭先生の言葉は、「犯罪者との接し方」、そして、「犯罪者をつくらないための周りの様子」という犯罪者の立ち直り方と犯罪者が減るためにという意味にもとらえることができると分かりました。このように考えると教頭先生の言葉には、クラスだけではなく社会においても言える事だと思いました。

これからも教頭先生の言葉を念頭に置き、学校生活、社会生活を送っていきたいです。

〈優秀賞〉

みんなのために

木津小学校　三年　福　井　一　颯

「いっさくん、おはよう。」

毎朝、登校の時に見まもりたいのボランティアのおじさんがあいさつをしてくれます。前から、ぼくのことを知っているので、名前をよんでくれます。一年生の時は、はずかしくてあいさつができなかったけれど、二年生からは、自分からもできるようになりました。

少し前に、新しい大きな道ができ、交さ点は事こが多いため、ぼくたちが安全に登校できるように、おじさんは、いつも見まもってくれています。

ある日、おじさんが道路の草むしりをしていました。ぼくは、どうしてそんなことをしているのだろうと思いました。どうしてかというと、草があってもだれもこまらないし、だれも見ていないからです。ぼくは、草むしりなんてめんどくさいし、やりたくありません。だから、おじさんに聞いてみました。すると、

「ここの道は、みんなが通る道。草がいっぱいはえていたら、通った人がけがをするかもしれないし、虫がいていやな人がいるかもしない。少しでも道がキレイになったらいいなと思ってしているよ。」

と、教えてくれました。ぼくは、おじさんは、みんなの安全のためにしていることがわかりました。

家に帰ると、げんかんやにわに草がたくさん生えていることに気づきました。ぼくは、友だちや弟と外で遊んだり、バスケの練習をしたりすることが多いです。草が友だちのくつひもにかかってころんだり、弟が虫にさされたりしたら、いやだなと思いました。

そこで、お母さんに、

「草むしりしよう。」

と、言いました。

やってみると、あつくて、虫もたくさんいて、なかなか

ぬけない草や、ぼくのこしまである草があり、とても大へんでした。でも、おわると、とてもキレイになってうれしい気持ちになりました。そして、

「これで安全に遊べるね。」

と家ぞくと話し、もっとうれしい気持ちになりました。

今まで、家の草むしりをしたことがなかったけれど、家ぞくやみんなの安全、安心のために、これからもしていきたいです。

「ええところ」を見つけていくよ

太田小学校　四年　**山口永眞**

わたしは、四人きょうだいです。わたしの下に弟がいます。お兄ちゃんたちは、部活やじどうクラブへ行っているので、いつも弟と二人で遊ぶことが多いです。だから、わたしは、ほぼ毎日、弟の世話をしています。弟はわがままで、ちょっと大変なので、わたしの休けいとねる時間が少なくなります。

でも、弟には「ええところ」がいっぱいあります。一番たすかる「ええところ」は、やる気が出ると、重い荷物を自分から持ってくれるなど、力仕事をしてくれるところです。

他にも、いっぱいあります。「ええところ」二つ目は、わたしのやってほしいことをやってくれるところです。たまに、やってほしいことを聞いてくれないこともあるけれど、わたしがたのむと、ほとんど聞いてくれます。

三つ目は、わたしが遊びに行くとき、いっしょについてきてくれるところです。

四つ目は、わたしの気分が落ちこんでしまったとき、弟が、わたしをえ顔にするために変顔をしたり、おもしろいことをしたりしてくれるところです。そこが一番うれしい「ええところ」です。

五つ目は、知っている人にも知らない人にも、え顔であいさつをするところです。あいさつをすると、その相手の人もにっこりえ顔で返してくれます。これは、わたしにはできない弟の「ええところ」だと思います。

わたしは、友達をつくるのが苦手です。どうすれば友達をつくれるのかなやんで、お母さんに相だんすると、

「ゆう気を出したらいいよ。」

と言われたので、ゆう気を出してみると、六年生の女の子が友達になってくれました。

わたしは、もっとたくさんの友達をつくりたいと考え、自分でもいろいろな方法をさがしていたとき、『ええところ』という本を知りました。この本では、人の「ええところ」を見つけて伝えると、言われた人はうれしい気持ちになり、なかまみんながやさしい人になりました。そういえば、弟も「ええところ」を見つけてほめると、とてもよいえ顔になりました。わたしは、人をうれしい気持ちにするには、その人の「ええところ」を見つけて、ゆう気を出して伝えると、弟のようにえ顔になり、なかよしになるんだと思いました。

わたしは、お母さんと弟から教えてもらったことを生かして、友達がうれしくてえ顔になる「ええところ」をたくさん見つけて、たくさん伝えられる人になり、なかよしの友達をふやしたいと思います。そうすれば、きっとみんながえ顔になり、なかよしさんがたくさんできると思います。そして、なかよし組をたくさんつくれば、一人ぼっちの人やけんかをする人がいなくなると思います。

わたしは、弟の「ええところ」を見つけたみたいに、これから、友達の「ええところ」をたくさん見つけて、みんなのえ顔をふやし、え顔いっぱい、「ええところ」いっぱいのなかよしをふやしていきたいと思います。

ボランティア清掃

福岡小学校　六年　**浦山知也**

「家族で行こう！」

そう言い始めたのは、お母さんだ。ぼくは、二年生の時から年に一度、家族みんなで地域のボランティア清掃に参加している。最初は面倒くさいと思っていたが、登下校中に意識して道を歩いていると、意外とたくさんのごみが落

ちていることに気付いた。「このままではいけない。」ぼくは、街をきれいにしなくてはいけないと思うようになった。

ボランティア清掃当日。

「おはようございます。」

と地域の人とあいさつをして清掃が始まった。公園の周りや川沿い、縁石の近くには、たくさんのタバコの吸いがらや金属片、ペットボトルのキャップなどが落ちていた。ぼくは最初、汚くて嫌な気持ちになっていたが、金バサミを使って拾っていくうちにごみが減っていく様子が目に見えて分かり、少しずつ嫌だと思う気持ちは減っていった。ごみの他にも道沿いに生えている草むしりもした。もくもくとごみを拾ったり草を取ったりしているうちに、ボランティア清掃がだんだん楽しくなってきた。気が付くと、袋がいっぱいになっていたので、新しい袋をもらいに行った。

「いっぱいになったね。」

と地域の方に言われて、とてもうれしい気持ちになった。ぼくは、やる気がわいてきて、もっとがんばろうと思った。夢中になって拾っているうちに、自分の周りにごみや草がすっかりなくなっていることに気が付いた。

最後のごみ袋を地域の方に渡した時、

「ありがとう。とっても助かったよ。来てくれてありがとうね。」

と言われた。最初は面倒だと思っていたのに心からボランティア清掃に参加してよかったと思えた。

家に帰る途中、お母さんに、

「きれいになったね。」

と言われた。ぼくは、改めて辺りを見渡してみた。公園や川沿い、縁石がある道沿いに落ちていたごみや草はすっかりなくなり、本当にきれいになったと思った。「ぼくの力で街がきれいになったんだ。」急に、自分が地域のために役に立つ一人の人になれたように感じた。ほこらしく思った。

「ぼくたちの街は、ぼくたちの力で、きれいにしていかなくてはいけない。」ぼくは、これからも地域のボランティア清掃に積極的に参加して、地域をきれいにしていきたいと思った。

これからは、地域のボランティア清掃に参加するだけではなく、休みの日には、自分から積極的に地域のごみ拾いや草むしりを行って、ぼくの住む街がいつでもきれいな状態を維持していきたい。今度は、ぼくが、

「家族で行こう！」

という番だ。

かけがえのない家族との時間

福岡小学校　六年　綿　谷　果　歩

みなさんは家族との時間を大切にしていますか。私は、大切にしています。

「今日、何かあった？」

これは毎日の晩ご飯の時の会話です。母は、私が一人で食べることがないように、また誰かと会話できるように、たくさんの工夫をしてくれています。そのおかげで、私は毎日のご飯の時間をいつも笑顔で過ごすことができ、これを当たり前だと思っていました。

二〇二四年一月一日に能登半島地震が起きました。その時、私はちょうど家族と一緒に初詣に出かけていて石川県の倶利伽羅不動寺にいました。突然周りの人たちの携帯電話から音が鳴り響き、その後、大きな揺れに襲われました。仏具が、

「ガラガラ、ガッシャンー。」

と激しい音を響かせて倒れました。周りにいた人たちも、

「キャー。」

と、パニックになり、叫んでいる声が聞こえました。私は、父と母、姉と手を取り合ってかがんで小さくなっていました。揺れが収まり、なんとか無事に家に帰ることができましたが、家の中は本棚の本や食器棚の皿など、様々なものが散乱していました。そんな状況でもさらに余震は続き、とても不安な時間を過ごしました。

それでもその間は家族と一緒にいたので、とても心強かったです。もし地震が起きたとき、一人だったら不安で心

細くて、その状況を乗り越えることはできなかったと思います。

「家族と一緒に居られること。」

今までは当たり前だったこの時間が、とても、貴重であると感じました。そして、家族を大切にしなければいけないということに改めて気付かされました。

地震に襲われた被災地の人たちは、今でも安心して眠ることができず、不安でいっぱいだと思います。発生直後は、富山県に住む私ですら、余震が怖くて眠れませんでした。最近のニュースでも家が壊れて住む場所がなくなった人や、崩れた家の下敷きになった人、行方不明になった人がたくさんいることを報道していました。その人たちも地震が起きる前は、毎日家族と笑顔で過ごしていたと思います。それをすべて奪い去った災害をみんなで乗り越え、明るい社会になることを心から願っています。

今、当たり前のように何気なく家族との時間を過ごしていませんか。今あなたが過ごしているその時間は、本当にかけがえのないものなのです。家族で過ごす時間を一分一秒、大切にすることで家族の仲が深まり、いつでも笑顔になれると思います。私自身もこれからは、家族との時間を「当たり前」と思わず「かけがえのない時間」と思って過ごしていきたいです。そして、家族を大切にする大人になりたいです。

僕たちに出来るポジティブキャンペーン

野村小学校　六年　吉田　琉生

最近、社会を明るくする運動について調べていると、「ポジティブキャンペーン」という活動があることを知りました。このキャンペーンは、人々に笑顔や元気を届けることを目指すもので、私たちも参加できることがたくさんあると感じました。

まず、ポジティブキャンペーンの意味を知るために、インターネットや本を使って調べました。ポジティブキャンペーンは、周りの人々に感謝や思いやりを伝えることで、みんなが幸せになれるようにする運動です。例えば、友達に「ありがとう」と言ったり、「頑張って」と励ましの言葉をかけたり、「あなたは大切な存在だよ」とポジティブな言葉をかけたりすることがその一環です。このキャンペーンの内容を知った僕は、身近なところから始めることができると気付きました。

僕たちができる具体的な行動として、まずは学校での挨拶を大切にすることがあります。「おはようございます！」と明るく挨拶することで、友達や先生も笑顔になり、一日が楽しくなります。

次に、感謝の気持ちを伝えるために、家族や友達に手紙を書いてみることもいいアイデアです。手紙には「いつもありがとう」とか「あなたがいるおかげで楽しい」といった気持ちを込めて書きます。そうすることで、相手も喜んでくれるし、僕たちも心が温かくなります。

また、地域のボランティア活動にも参加したいと思っています。例えば、僕はサッカーをするのが好きなので、よく利用している公園の掃除をしたり、高れい者の方々のお手伝いをすることで、みんなが快適に過ごせる環境をつくることができます。これによって、地域の人たちとの絆も深まります。

これらのポジティブキャンペーンを通じて、僕は「小さな行動が大きな影きょうを与える」ということを学びました。僕たち一人一人の思いやりや優しさが、社会を明るくする力になるのです。これからもポジティブな気持ちを大切にして、周りの人たちに笑顔を届ける活動を続けていきたいです。

みんなで力を合わせて、明るい未来をつくるために、僕たちにできるポジティブキャンペーンを広げていきましょう。

あなたから始めるＳＮＳ改革

高陵小学校　六年　**渋　谷　和希子**

あなたにとってＳＮＳとは何ですか。ＳＮＳを使うことで、私たちはすぐに多くの人に発信することや、県外や海外など、遠い所にいる人ともつながることができます。そのため、災害が起こったときの情報収集や安全確認、コロナウイルスの感染拡大を防ぐための自宅からのリモートワークや動画配信など、ＳＮＳの長所をうまく活用することで、私たちの生活はより豊かで便利なものへと進化してきました。しかし、よい側面だけではありません。ちょっとした不注意や思い違いで人のことを深く傷つけたり、時にはその人の大切な命までもうばったりする危険性もかねそなえています。ＳＮＳという道具を使って、人々の笑顔を今よりももっと増やすためには、どんな心がけや行動をするべきなのでしょうか。ＳＮＳという存在は何のためにあるのでしょうか。社会をより明るくするために、私たちの日常生活を支えているＳＮＳについて考えました。

まずは、人に不快な思いをあたえる言葉の発信について注目しました。ある有名人が投稿した言葉が、意図していなかったふうに大勢の人たちに解しゃくされ、誤った情報のみがネット上で広まったという記事を目にしました。また、問題とは直接関係のない人たちがより多くの人の関心をひきつけようと事実を大げさに表現したり引用元が分からないまま広めたりすることで、偏見や誤解が生まれ、当事者たちの本当の気持ちや目的に耳をかたむけることがないがしろにされているように感じます。情報があらゆる人の手に渡ることで、一度発信した言葉を取り消すことは、かなり難しいです。対面で話していたのであれば、その場ですぐに発言する側と受け取る側の認識の違いに気付き、あやまれば仲直りできるかもしれません。しかし、ＳＮＳの場合はその言葉だけでは伝えられなかった自分の素直な思いが相手に届くまでに時間がかかってしまいます。

これは有名人に限った話ではありません。私の友達もＳＮＳのやり取りで別の友達から送られてきたメッセージを読んで傷ついた経験があります。この場合は一対一のやりとりであるため、広まることはなくても相手の顔が見えない分、その人との今まで築いてきた信らい関係がくずれてしまいます。相手の感情の細かいところまで、言葉だけで全て理解することの難しさを感じました。

次はコミュニケーションの取り方の変化について注目しました。ＳＮＳを使ってコミュニケーションを取ることが増えると、どんどんそのおもしろさにはまっていき、自分では気付かないうちにスマートフォンに依存してしまう人が増えています。ＪＯＢ総研による二〇二二年スマホ依存の実態調査では、回答者のうち８割がスマホ依存に当てはまるという結果が明らかになりました。目の前の小さなスマートフォンに夢中で交通ルールや周りの人のことなど、大切なことを忘れてしまいます。スマホはいつだって自分の相手をしてくれますが、家族や友達と会える時間や機会は限られています。話しているときの表情や声のトーン、様子など、対面でしか感じられないこともたくさんあります。後悔しないような時間の使い方を考えるべきではないでしょうか。

ＳＮＳがどんどん発展していき、今ではＳＮＳのない社会は考えられなくなっています。そして、年れいが上がればスマートフォンをもつことが当たり前の世の中になっています。しかし、それは本当に必要なのでしょうか。私はまだ自分のスマートフォンを持っていませんが不自由だと感じることは特にありません。友達や家族に連らくしたいことがあるときは家の固定電話から連らくできるし、急ぎの用でなければ、直接会ったときに確認すればいいだけのことです。その日にあった出来事をＳＮＳに投稿して、友達から「いいね」をもらうことはできなくても、夕食の時に家族に話すと、とてもいい反応が返ってきます。ＳＮＳから距離をおいて、自分の周りの日常や自然に目を向けると、それだけで十分だと気付けるかもしれません。

ＳＮＳは、本来私たちを幸せにするために開発されたはずですが、使い方を間違えることで悲しみがうまれていたとしたら、本末転倒です。自分の発信が相手や社会にもた

らすえいきょうを想像すること、ＳＮＳにふり回されるのではなく自分でコントロールすること、そして対面式であれ非対面式であれ相手を尊重する姿勢を忘れないことは、よりよい明るい社会づくりに間違いなくつながると思います。小さな個人が集まり大きな社会を構成しているので一人一人の意識の変化が大きな社会を動かします。この社会はあなたから明るくすることができるのです。

呼び方の怖さ

福岡中学校　一年　**宮　﨑　結　月**

うれしくも喜びもしないニックネームで呼ばれると、あなたはどう思いますか？傷つきますか？それとも、なぜそう呼ぶのか問いつめますか？私はニックネームの怖さについて考えました。これは私の実体験から考えたことです。

私が昔、通っていた習い事の教室には、ある男の子がいました。彼は、人の物を勝手に取ったり、物を投げたり、机の上に乗ったりというような行動をしていました。そのようなことばかりをするために、いつしか周りから、彼はある動物の名前で呼ばれるようになっていました。私も物を取られたり、授業を妨害されたりしていたので、彼に嫌気がさしていました。彼がそのように呼ばれていることに対して、私は何とも思っていませんでした。今思えば、その時にこのような呼び方はダメだと気づくべきだったと思います。それから、段々と彼について知っていきました。その男の子は、生まれつき体が弱いので、行動を制限されていました。例えば、階段を使わずに、エレベーターを使うこと、それから走ってはいけないことなどです。もしかすると、そのようなことが嫌で、保護者の目が届かない教室で、伸び伸び行動していたのかもしれません。そして半年くらい経ち、私は、

「人のことを動物の名前で呼ぶことは、いじめなのかもしれない。」

と思うようになりました。それに気づいた私は、彼のことを名字で呼ぶことにしました。私が彼のことを名字で呼ぶようになると、彼の悪ふざけは相変わらず続きましたが、前のような悪質なことはしないようになりました。彼は表面上では、なんとも思っていないように取りつくろっていましたが、本当はニックネームで呼ばれることが嫌だったのだと思います。ただ、このときに、同じように彼のことをニックネームで呼んでいた友達に、

「彼のことを動物の名前で呼ぶことはやめたほうがいいんじゃないか。」

と提案するべきだったと思います。結局、彼に対して謝ることもできずに、私はその習い事をやめました。彼に対してはたくさんの罪悪感があります。彼が私たちにしたことはとても迷惑なことでした。しかし、だからといって同じように嫌な方法でやり返すのはよくなかったなと思います。できることならば、彼にもう一度会い、このことに対して謝りたいです。

名前は、その人が一人の人間だという証です。また、親から初めてもらったプレゼントです。ニックネームとは、相手より親しくなるための一つの手段だと思います。けれど、その使い方を誤れば、ただの悪質ないじめになると思います。ですから、何のためのニックネームなのかを考え、相手がうれしい、喜ぶ、笑顔になるような、みんなが仲良くなるような呼び方を心がけていきたいと思います。それが、よりよい社会をつくっていくことにつながると思います。

挨拶から始まる人との関わり

志貴野中学校　一年　**兼　本　煌　大**

僕は幼い時から、母親に挨拶をするように教えられ育てられた。朝、起きると「おはよう。」一日の最後には「おやすみなさい。」と言い、日常生活の中で挨拶を交わすことは

当然の事だった。母親は、僕の何気ない声の大きさ、声のトーン、しぐさなどから気持ちを読み取ることが上手だった。いつも、何も言葉に出していないのに自分の気持ちを読まれているように思っていた。

ある日、小学校の先生から、中学校の入学式で新入生代表挨拶をしてほしいと言われた。僕は言われた時、「嫌だな。大役すぎて自分に出来るのかな。言えるのかな。」と、うかない顔で「はい、分かりました。」と答えた。先生がそれに気が付き、もう一度確認のためか同じことを聞いてこられた。「はい。」と僕は答えた。いつも母親に自分の気持ちを読みとられているように、先生にも自分の自信のなさをみすかされていると感じ、恥ずかしく思った。

入学式の前に、中学校の体育館に行き、新入生代表挨拶の練習をする日があった。その日は朝から緊張して、母親にも不安な気持ちがばれていた。もともと「不安だ。」とか自分の気持ちを言葉に出すのが苦手だった僕は、不安な気持ちを、家族や友達など、誰かにどこか気が付いてほしいという気持ちがあった。それを母親はいつも気が付いてくれていて有難いと思う存在だった。母との関わりから、何気ない挨拶やコミュニケーションをすることで人の気持ちは読み取ることができるし、読み取ってもらえることを理解していた。

そして、中学校の入学式当日。式が始まり、いよいよ、新入生代表挨拶の時になった。知らない同級生たちや、先輩たち、先生たちの前で自分が挨拶をした。頭が真っ白になり、不安な気持ちでいっぱいだったが、何とか大役を終えることができた。これからここにいる同級生たちと一緒にがんばりたいと心に誓った日だった。

中学校生活が始まり、僕が新入生代表挨拶をしていたことを覚えてくれている同級生が何人かいて、「おはよう。」と挨拶をしてきてくれた。見たことがない同級生が自分に挨拶をしてきたことにびっくりしたが「おはよう。」と返した。「何かいい日になりそうだな。」とても気持ちの良い瞬間だった。挨拶をしたことで話が広がり、同じ趣味の話で盛り上がった。そして、学校生活がすすむにつれ挨拶をする友達が増え、いろいろなことを話す関係になった。挨拶を交わすことで広がる友達の輪に幸せな気持ちになった。知らなかった人でも挨拶を通して身近な存在へと変わった。人との関わりを築く上で挨拶はとても大切なものであると、僕自身考えさせられた。

これらの経験より挨拶を通してコミュニケーションが広がり、大切な存在へと変わると知った。世の中の一人ひとりが大切な人を増やしていけるようになったら、社会は明るくなると思う。不安な気持ちがあった時、人からかけてもらえる言葉の第一声である挨拶はとても気持ちの良いものだ。自分も友達に気持ちの良い挨拶をすすんで続けていきたい。そんなささいなことが明るい社会につながればと思う。

小さなことを大きな愛をもって

戸出中学校　三年　**中　田　昇　馬**

町の中で困っている人に出会ったら、どうしますか？声をかけますか？それとも、見て見ぬふりをしますか？

私の母は、聴覚障害者です。小学四年生のときに、突発性難聴にかかり治りませんでした。右耳に補聴器をつけています。私が小学生の頃、聴覚障害者になりました。

補聴器をつける前は、聞こえづらくて何回も相手に聞き直していました。あまり何回も聞くと相手に不快な思いをさせそうで、聞こえたふりをしたことがあったそうです。実際に、嫌な顔をされたこともありました。だから、人とのコミュニケーションに大きなストレスを感じていたと話してくれました。

母が障害者手帳を取得して補聴器をつけたとき、私には気がかりなことがありました。それは、障害者になった母を、周囲の人たちが差別するのではないかということです。

何度も聞き返すし、それで時間がかかるし、迷惑ばかりかけて、やっぱり障害のある人は困るなと思われるのではないかと思ったのです。

ところが、私の予想に反して、周囲の人たちはとても優しかったのです。障害者になった母は、相手に補聴器を見せるようにしました。すると、相手は母が聴覚障害者であることを理解して、大きな声で話したり、文字で伝えたりと工夫をして対応してくれました。

母は、「障害者手帳を持つまで、自分の耳が聞こえにくいことを周りの人たちにどのように説明したらよいか分からなかった。」と言っています。「健常者と障害者の間のグレーゾーン」のときの方がつらかったそうです。補聴器をつけていることで、「障害者なので、助けが必要です。」と言いやすくなったのです。

障害者を差別するような考えをもたないで、母に温かく接してくださった人たちに、感謝の気持ちでいっぱいです。今までは、買い物に行ったときなど、私が店員さんの言葉を母に伝えていました。でも、今は聞こえにくい母に対して、丁寧に対応してくださいます。母も相手の方も、気持ちよく過ごせるようになったと感じます。

それにしても、自分が障害者であることを自らアピールした母の勇気には、感服させられます。もし、私が聴覚障害者だったら同じことができたでしょうか。差別的な扱いを受けるのではないかと考え、ためらったと思います。でも、母は勇気をもって行動し、その勇気に周囲の人たちが応えてくれました。車いすアスリートの廣道純さんが、「真剣に思いをぶつけたら、必ず真剣に返ってくるって気づいたんです。」と言っておられます。母の勇気ある真剣な行動に、周囲の人たちが思いやりある行動で真剣に応えてくださったのです。

障害がある人を含む全ての人々にとって、住みよい社会とは、どのような社会でしょうか。私は、母のような障害がある人や障害がなくても支援が必要な人が、「助けてください。」「手を貸してください。」と、ためらいなく言える社会だと思います。全ての人が、分け隔てられることなく、お互いの人格と個性を尊重した差別のない社会を実現していかねばならないのです。

それでは、社会を構成する私たち一人一人は、具体的に何をすればよいのでしょうか。難しく考える必要はありません。「助けてほしい。」「手を貸してほしい。」という声にしっかりと耳を傾け、行動に移せばよいのです。一人一人ができることは、ささやかなことかもしれません。でも、みんなが行動に移せば大きな力になっていくと思うのです。

町の中で困っている人に出会ったら、どうしますか？

私は、「何かお困りですか？」「お手伝いしましょうか？」と声をかけることから、実行してみようと思います。

マザーテレサの、「私たちは大きいことはできません。小さなことを大きな愛をもって行うだけです。」という言葉を常に念頭に置いて。

誰もが生きやすい社会

戸出中学校　三年　木　村　葵　衣

小学四年生のときだった。

「あの人、めっちゃ、友達の悪口言っとる。」「いつも、(私たちのこと)仲間外れにしてくる。」…全く身に覚えのない悪口を言われ、広められた。

それを聞いた人たちは、「あの人、遊びに入れんとこ。」「あの人抜きで遊ぼう。」と、わざと聞こえるように言ってくる。私が、「遊ぼう。」と誘っても無視される。本当に怖かった。だから、親や先生にすぐに相談した。一人で抱え込まなかったから、早く解決して、つらい思いをあまりしなくて済んだ。

中学に入ってから、また同じようなことが起こった。仲良しだと思っていた二人に、仲間外れにされ陰口を言われた。私はつらいのに、このときは誰にも相談できなかった。また二人と話し合おうともしなかった。だから、関係はよ

くなるはずはなく、学校に行きたくないとまで思うようになった。幸いなことに私の様子に気付いてくれた先生がいた。その先生に相談することができて、気持ちが楽になった。今では、その二人と仲直りすることができ、当たり前の学校生活を楽しく過ごせるようになった。

でも、周囲を見ると、同じ学年なのに陰口を言っている人、違う学年の人に対して悪口を言っている人などがいる。小さなうわさ話がどんどん広がって悪口になり、そのせいで学校に行けなくなる人も少なくないと思う。

もっと視野を広げると、社会には、いじめで苦しむ人だけでなく、障害のある人、病気の人、犯罪や非行をして立ち直ろうとする人など、「生きにくさ」を感じ苦しんでいる人がいるのではないだろうか。

では、なぜこの人たちは「生きにくさ」を感じているのだろう。私は、「偏見」や「差別」が社会にあるからだと思う。

新型コロナウイルスが蔓延したとき、コロナ差別が起こった。つい数年前だから、記憶に新しい。「コロナに感染した人とは、一緒にいたくない。」と言ったり、医療従事者に対する差別があったりした。感染への恐怖からの言動かもしれないが、私たちは、自分の言葉や行動に責任をもつべきだと思う。

障害がある人に対して、偏見をもっている人は少なくない。電車に乗っていたとき、障害がある人が隣に座ったら、嫌そうな顔をして席を立った人がいた。町で障害がある人を見ながら、コソコソ話している人たちを見たことがある。実は、私も同じことをしてしまった経験がある。調べてみると、「無意識差別」という言葉があることを知った。障害がある人に対して、そのような態度をとるのは「無意識」なのかもしれない。でも、それは障害のある人を確実に傷つける。普段、口にしていることや今までの行動について、一人一人が見直すことが重要であると思う。

犯罪をした人に対しては、もっと強い「差別」や「偏見」が存在していると思う。犯罪は、絶対にしてはならないことだ。しかし、罪を償い過去を反省して、やり直そうとする人がいる。そんな人たちを「犯罪者」だからというだけで、差別したらどうなるだろう。立ち直りのチャンスをつぶしてしまう。社会の中で「生きにくさ」を感じる人が出てくるに違いない。立ち直ろうと決意した人を社会で受け入れたり味方になったりすること、犯罪や非行を生み出さない家庭や地域づくりをすることが、とても大切だと思う。

今は「誰もが生きやすい社会」とは言えない。私たちは、様々な「差別」や「偏見」をなくしていかねばならない。

そのために、まず、私の相談にのってくれた親や先生のように寄り添って支えてくれる人が必要だと思う。困っている人に、声をかけ、背中を押し、粘り強く支えてくれる人が一人でも多くなればいい。そうなれば一人ではない、共に支え合っていこうという思いがあふれた社会になるはずだ。

また、社会の中には、いろいろな人がいる。一人一人の違いを、その人の個性として捉える人が増えてほしい。一人一人の個性の違いを認め、尊重し合えることができたら、「差別」や「偏見」はなくなっていくと思う。

社会を構成する一人一人の心の在り方を変えていけば、「誰もが生きやすい社会」が実現できる。社会の一員として私は、相手のことを自分のことのように大切にする言動をとれる人になりたい。様々な人の「生きにくさ」を自分事として捉えれば、相手の気持ちが分かる。自分に何ができるか見えてくるはずだ。そんなふうに考える人が増えれば、よりよい環境をつくることができる。「誰もが生きやすい社会」が実現する日が、一日も早く来ることを願っている。

過去から学べたこと

高陵中学校　三年　冨田芽依

「いじめ」、私はいじめには三つの立場があると考えている。いじめをする人、いじめを受ける人、それを見ている人。私はこの立場をどれにもなったことがある。そこから

の視点や考えから、明るい社会をつくっていくために、私たちができることを考えていこうと思う。

まずは、いじめを受けた立場だ。内容はいつも仲良く遊んでいた子たちから無視をされるようになったり、グループ活動からハブられたりするようなものだった。暴力をふるわれたり、靴を捨てられたりするなどの目にみえるいじめではなく、周りにもあまり気づかれにくく、その当時はすごく悲しかったのを覚えている。仲の良かった子からということもあって、周りの人に相談しても信じてくれないのでは？という恐怖があり、私は誰にも相談も話もできないままでいた。時間が経てば、無視やハブられることも無くなったが、自分の悲しかった気持ちは消えないし、一人になるという孤独も消えるわけではない。この立場で私が学べたことは、辛いことがあったら、誰かに相談して助けを求めても良いということだ。そうすることで、もしかしたら解決できるかもしれないし、何より自分の心が軽くなると思う。私はその一歩がふみだせなかったが、もし辛い人がいたら寄りそえるようになりたいと思った。

次はいじめをする立場だ。私は今すごくこのときについて後悔している。やり直せるのならやり直して、相手を悲しませるようなことをやめさせたい。内容は私を無視したりハブったりした子に同じことをしたというものだ。その当時はあっちが先にやってきたから、私は別に悪いことをしてない。自業自得。と思っていた。が、今ではその行動や考えは間違っていると言いたい。自分も辛い思いをして相手の気持ちが分かるはずなのに、その行動をとってしまった自分を責めたい。この立場で私が学べたことは、やはりいじめは絶対ダメということと、自分の思う感情のままに行動するのは良くないということだ。感情のままに行動してしまうと、それが正しいのかどうかを判断できなくなってしまうときがあるから、一度立ち止まって、それが正しいのか考えて行動していきたい。

最後はいじめを見ている人の立場だ。私はこの立場の人がいじめをなくすうえで一番大切なところだと思う。そのいじめを見ているのに、見ないふりや知らんふりをする人が多ければいじめは無くならないし、ひどくなっていく一方だと思う。見ている人が周りの大人などに言えたら一番いいのだが、自分も一緒にいじめられてしまうのではという恐怖もあり一番難しいと思う。私もその様子をみていたが、言うのが怖くて見ていないふりをしていた。もしあのとき、大人に言っていれば、その子は救われただろうと何度も思うことがある。このこともすごく後悔している。この立場から学べたことは、例え友達であってもダメなことはダメと言えるようになろうということだ。もしかしたら嫌われるかもという気持ちもあるかもしれないが、間違っていることは教えてあげ、正しいと思う行動をとれるようにしていけたらすごく良い社会がつくれると思う。

今では、私は自分の過去をふまえて、友達のかかわり方などに気を付けている。何度も間違った行動をとってしまったが、そこから学べたことを生かして生活を送りたい。また、そこで学べたことを自分だけでなく、他の人へも広められたら、より明るい社会をつくっていくことができると思う。

おもてなしの心で

伏木中学校　三年　**山下　稟一寅**

私は二〇二四年現在、フランスパリで開催されているオリンピックのハイライトをＳＮＳを通して視聴している。選手たちの熱気や観客の声援がひしひしと伝わってきて、これぞオリンピックだと思った。有観客のオリンピックは八年ぶりだからだ。そんなパリ五輪の世界の反応を調べてみて驚いた。「セーヌ川が汚い」や、「誤審が多すぎる」などといった、酷評が多かったのだ。そこまでしなくてもよいのではないかと私は思った。

なぜなら、開催へ向けて百年以上遊泳禁止だった川の水質を改善しようと力を注いだ人々がいるだろう、審判を目指して頑張ってきた人々がいるだろうと考えたからだ。さらに、誰にだって判断ミスはあるのに、「審判だから」という理由で少しのミスも許されないのはおかしいと思った。しかし、今回のことで、多くの判定要員が必要であること

が分かった。

では、選手や選手に声援を送る人が納得できる大会にするにはどうすればよいだろう。

僕は、ＩＯＣがまた東京を開催地にすることを望んでいると耳にした。その理由の一つが東京オリンピックの時に「選手が過ごしやすかった」という意見である。冷房の効きがよく、食事が質、量ともに優れていたという。また、試合の断定が正確で、スタッフが手厚かったという意見もあった。だから大会が丸く収まったのだと思う。

そこから考えられることは、選手一人一人に対する対応がよい方がその大会自体がよい物となるということだ。まだパリオリンピック・パラリンピックは終わった訳ではないのだからこそ、フランスが全世界の評価をがらっと変えることを私は望んでいる。

こういった事例は、珍しいことではないのだ。動物への扱いが丁寧で大切にしていることが分かる動物園は、評判がよく、動物たちと飼育員さんとの絆が強くなる傾向にある。他には、食材や接客にこだわった飲食店などが挙げられる。どんなことも、準備や計画を抜けのないようにしなければよい物にはならないし、満足も得られないのだ。

最後に、社会を明るくするためには、公平な優しさが必要だと思う。パリ五輪だと選手、観客、審判、選手を支える人々への配慮が欠かせないし、ルールを決めなければならない。国や自治体が協力して成功へと向かえば、どんなことも可能だと思う。

日本だけに目を向ければ、少子高齢化対策や自然災害対策も乗り越えられる。政府が自治体に公平な補助をすれば、解決は早い。世界に目を向ければ、紛争、難民、差別、地球温暖化など日本より多くの問題がある。その対策としてＳＤＧｓがあるが、現状はまだ意識が個人によって差があり、本格的ではないと思う。決められた目標はとてもよいものだと思うから、全世界のトップの人が声を挙げて実行しなければならない。

一人一人の意識が社会に大きく響くのではないかと思う。そうすれば自ずと社会は明るくなるだろう。

〈入選〉

〈小学生の部〉

明るい社会とはなんだろう　高岡西部小学校　四年　中村　はやと

社会を明るくする運動　太田小学校　四年　橋本　凜花

社会を明るくする運動　太田小学校　五年　鞍田　未優

社会を明るくするために　木津小学校　五年　小倉　奏志

寄りそう心で社会を明るく　野村小学校　六年　里　夏衣

みんなで広める声かけの輪　野村小学校　六年　長田　季依

そこはゴミ捨て場じゃないよ！　高陵小学校　六年　小倉　一晃

人の心に響く言葉　高陵小学校　六年　古川　優

社会を明るくする運動　能町小学校　六年　中谷　真央美

〈中学生の部〉

すべての人に思いやりを・・・　福岡中学校　一年　岡島　芽依

美しい街をつくるために　福岡中学校　一年　梅田　琉生

社会を明るくするためには　伏木中学校　二年　一川　あずな

心の隙に負けるな！　五位中学校　二年　余川　七愛

大切な命　志貴野中学校　三年　蒲田　知世

心の傷は消えない　南星中学校　三年　上村　杏

社会を明るくするために　五位中学校　三年　柴田　美乃

<最優秀賞>

【みんなでつなげば明るい社会】

野村小学校6年

山 岸 千 愛 璃

【手をとり明るい未来】

志貴野中学校2年

甲　栞 和

ポスターの部

小学生作品

＜優秀賞＞

【みんなでえがお】

能町小学校3年

黒 瀬　遥

【「ありがとう」 相手も自分もいい気持ち】

五位小学校3年

森 田 桃 世

【きく･はなす　つながるココロ】

能町小学校3年

柴　楓 真

【みんな仲間　明るい社会】

野村小学校6年

大 井 崇 生

【あなたらしく　いればいい】

野村小学校6年

柿 原 永 奈

【やめて！　ポイ捨て】

木津小学校4年

竹 端 春 瑛

編集後記

「社会を明るくする運動」高岡市推進委員会では、今年も高岡市内小・中・特別支援学校・義務教育学校の児童・生徒に作文・ポスターコンテストの募集を呼びかけました。

作文の部においては、小学校は七校から二百三十点（昨年度から倍増です）、中学校は七校から百三十四点の作品が集まりました。その中から、最優秀賞を四点、優秀賞を十二点、選出しました。

入賞作品は、日常の家庭生活や学校生活で体験したことなどを基に、「社会を明るくする」ために自分はどのように取り組んでいくかを強く訴えていました。特に地域の方たちや学校の先生・友達、そして家族とのつながりを通して感じたこと・考えたことを工夫して書き表し、それが読み手の心に深く響きました。

ポスターの部の出品数は、小学校は五校から九十八点、中学校は二校から十七点でした。その中で、最優秀賞を二点、優秀賞を九点、選出しました。

入賞作品は、どの作品も心を込めて丁寧に描いてあり、創造性、独創性に富んでいました。それぞれの作品には社明運動に関する題名が付けられ、主題が明確に伝わるような工夫が見られました。

最後になりますが、とても暑かった今年の夏に根気強く取り組み、作文・ポスター作品を仕上げた児童・生徒の皆さんの頑張りに頭が下がります。ありがとうございました。また、熱心にご指導くださった各校の先生方に厚く感謝を申し上げます。この作品集を多くの方々に目を通していただくことで、作品を作り上げた児童・生徒の励みや喜びが大きくなると思います。高岡市保護司会は、この作品集が、明るい社会の実現に向けての一助になることを心から願っています。

令和六年十二月

社会を明るくする運動高岡市推進委員会
高岡市保護司会　地域活動部会　副部長　正平　務

中学生作品

【一人じゃないよ】

志貴野中学校3年
西沢啓希

【一歩を踏み出す　勇気を共に】

高岡西部中学校2年
宮崎彩華

【助け合おう　地球は一つ】

高岡西部中学校3年
中村心耶

第七十四回（令和六年度）

〝社会を明るくする運動〟

作文・ポスターコンテスト

高岡市小・中学校表彰作品集

令和六年十二月十六日　発行

編　集　社会を明るくする運動高岡市推進委員会

〒933－0057　高岡市広小路七－五〇

高岡市役所　福祉保健部　社会福祉課内

電話（〇七六六）二〇－一三六六